

第 35 回佐賀県総合教育会議

○山口知事

今日は 35 回目の総合教育会議ということでお集まりいただき、ありがとうございます。

今、御案内がありましたように、山口和範佐賀県立大学学長予定者にも今日はお越しいただきまして、ありがとうございます。

高大連携という大事なテーマで、誤解を恐れずに言うと、これまで佐賀県の中での教育というのは高校までという感じですね。教育委員会も高校までのことに関しては答弁したり、議論はされていますけど、そこから後は、学生さん御自由にというところであって、それでも、佐賀県の例えば産業界でいうと、平成の最初の頃は6分の1ぐらいしか4年制大学に行かなかったので、多くの方々が産業界と多く結びついていたわけですが、今は御案内のとおりで半分以上が4年制大学に行くという時代になりました。非常にその実質的な課題もあります。

今回、県立大学をつくることにしておりますけれども、今からつくるのであれば、山口先生にも御支援、御協力もいただきながら、今までとは違う、むしろ今までは高校と大学で分断されていたものが、高校のときから大学はこういう形の学びができるんだということがフィードバックされて、産業界も県庁とは非常に強いわけですから、みんなが一つの土俵で、そこに大切な人材が乗ってくるというふうに、当たり前といえば当たり前だけど、今まで佐賀県ができていなかった部分が、今からつくる大学なので、教育委員の皆さんに申し上げると、本当に学長予定者にうってつけの山口先生なので、富士町で小学校生活を過ごされて、佐賀のいいところも課題もよく分かっていただいて、今まで頑張っていたいただいているので、今日はゲストということで来ていただきまして、議論に加わっていただけたらありがたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○内田政策企画監

ありがとうございました。

それでは、会議に早速入りたいと思います。

まず、私のほうから今日のテーマ等について御説明をさせていただきます。

子供たちを取り巻く社会というのが不確実性が非常に高いものになっています。人口減少、先の見通せない国際情勢、それから、ライフスタイルの多様化、AI、こういった不確実性の時代に適応できる人材の育成が必要ということで、そういうことを踏まえて佐賀県立大学の準備が進められていたり、全国の大学というのがそれに向かって取り組んでいるという状況にあるのかなと思っています。

その辺を踏まえて、山口先生から県立大学の今の状況、大学の今の傾向をお話いただければと思います。山口先生、よろしくお願いいたします。

○山口佐賀県立大学（仮称）学長予定者

皆さんこんにちは。お話をさせていただく機会をいただきまして、大変ありがとうございます。

今日のメインのテーマは高大連携ということですが、現在、佐賀県立大学でどうしているかという話と、高大連携といったときの一番の問題は多分入試になると思いますので、そのことについて5分程度でお話をしたいと思います。

今、大学の数を減らせみたいのをいろいろと言われていて、そもそも大学は高校生が入るところという印象をお持ちの方もいらっしゃるのですが、本当はそれ以上の色々な機能があって、今回、県立大学では、県内全ての人たちと連携しながら、みんなが成長していくということをすごく大切にしていきたいと思っていて、1つは、日本一プロジェクトが生まれる。プロジェクトというのは学生だけが行うわけじゃなくて、県内のいろんな方々と一緒になって、学生だけが成長するんじゃないで、そこに関わってもらう人たち全員が成長していく。チェンジ・メーカーということですので、今をよしとせず、よりよいものを突き詰めて常に考え続けて、変革を成し遂げられるようにということで、そこを目指しながら、今発表している内容として、大学は3つのポリシーの下でということで、アドミッションがあり、カリキュラムがあり、最終的にどういう形で学位を出すかということでのディプロマ。一番は、いわゆる知識を得るためだけということの組織としての大学ではなく、それをどう活用するか、県立大学としてそれを県民、または県に関わる方々にどう還元していくのかということを考えながらのPBLというのを中心にカリキュラムを動かしていきたい。だから、本を読んで、教室で授業を聞いて、それで試験を受けて、成績を取って卒業みたいなことというのはほぼ県立大学ではなく、それが必要なんですけど、メインは実際に現場に出て、その現場で何が課題で、それをどう解決すればいいのかというところに、いわゆる我々がこれまでずっと蓄積してきた大学の中に備わっている知を活用して課題解決に向かう。

そのために必要なこととして、アドミッション・ポリシーとしては、単なるテストの点数が良いとか知識を持っているというだけでなく、色々な人たちと協働できるスキルだったり、変えていくということについての意欲。得てして今の若い人たちは、良い会社に入りたいとか、今をすごく満足している。これは悪いことじゃないと思うんですけど、今を満足することで、チェンジということに対して消極的になっているところがあるので、その辺を変えられるようなことを入学者には求めていると思っています。

県内の色々なところを含むという話ですけど、大学は小中高との連携というのはすごくやっていきたい。例えば、高校の探究学習には大学生も一緒に加えさせてもらって一緒にやっていて、中学生、高校生があと2年経つとあんな感じになればなみたいイメージができるようなことを目指していければと思っています。

県立大学についても入試のこと色々考えているんですけど、実は3月に一般入試という

より総合型選抜をたくさんやりたいと話したら、多くの意見をいただいた。実はここに 2021 年と 2025 年で書かれていて、総合型選抜が増えていって一般選抜は減ってきている。少なくとも我々の時代に総合型選抜なんていう用語はなかったし、我々といっても 40 年ぐらい前ですけど、一般入試で、特に私は共通 1 次のいわゆる 1 期校、2 期校がなくなったときなので、国立は 1 回しか試験を受けられなくて、大学入試は僕は 1 校しか受けたことなく、受けさせてもらえなかったのですが、当時はテストの点数さえ取れば大学に入れるような形式でした。ところが、今は先ほど話したようなプロジェクトを実施していく。きちんとそれができるといことの確認も非常に重要で、あとはモチベーションで、この県立大学は結構特殊な大学になると思います。そこに合っているかどうかというのは、そこに集う人たちにとってすごく重要なことなので、マッチングをしっかりとやらないといけないということであると、総合型選抜か、高校側にお任せをして指定校推薦みたいな形で採るとというのが一番いいのではないかと考えていて、既に私立大学では特に総合型選抜が増えているというのと、元々指定校推薦は多くて、実際に自分の大学、立教大学でずっと経営学部にも所属して学部長を 8 年間トータルでやって、その中で、入試についてはすごくデータを見ながら変えてきました。データを見ながらというのは、立教大学の経営学部もプロジェクトベースの授業を数多くやっていて、企業と連携していて、普通の大学と若干違うところがあって、そうすると、モチベーションが非常に成績に影響してきていて、こっちの指導が悪いと言われればそれまでなんですけど、一般入試の子はやっぱりそこがなかなかうまくいってなくて、データに端的に出ていて、総合型選抜、いわゆる AO に近いところがすごく成績がいい。試験勉強だけ頑張っているというよりは、もっといっぱいいろんなことをやっておいてほしいというのは大学で長く様々な教育に携わっていて思っていることで、先ほど知事が富士町で育ってみたい話をされたときに、俺が一番考えたのは魚釣りするときの戦略ではないかと思っているんですね。そういう体験が本当はすごく大切で、それが課題解決をできるというところでの訓練になっている可能性があって、お金がかからないけど、そういう経験ができる佐賀というところで、本当いうと小中高、特に小学校なんかは、クラブ活動も含めて、そういうのを一生懸命やってほしいなというのはすごく思います。

今後、高大連携で、特に小中も含めてということであると、そこをどういうふうに今後詰めていくかというところで皆さんからいろいろと御意見とか御指導をいただければ思っています。本日はよろしくお願いいたします。

○内田政策企画監

ありがとうございました。

続きまして、教育委員会や学校現場の取組等について甲斐教育長から御説明をお願いいたします。

○甲斐教育長

本日の議題は、A I 社会における人材育成ということですが、学校でも少し生成 A I の活用シーンが広がってきました。例えば、先生のお仕事でいうと、授業の準備であったり、教材作成とか、あと、文書作成の補助というのに使っていますし、授業では、英語の授業において、例えば、自分でやった英文読解と A I が要約したものを比べてみたりですとか、自分で作った英作文のブラッシュアップに使ったりとか、そのほか、プレゼンテーションの作成補助であったり、考えるときの壁打ちみたいなものに A I を使うというシーンが増えてきております。

教科ごとにどういうふうに効果的に使うか、注意点も押さえながら、それぞれの教科ごとに研究を進めていきたいというふうに思っています。

そして、特別支援学校でもモデル校を指定しまして、やっぱり個々の特性に応じた教材作成等で力を発揮すると思いますので、そのような研究をやりたいと思っています。

また D I 人材育成でやっている SEIRENKATA においても、いかに A I に画像データを正しく読ませるかという学習の取組等もやっております。からあげとトイプードルの区別ができるように、どう学習させるかというようなものに取り組んでいます。

それとあと一つ、これは期間限定で9月までやっているんですけども、友だち A I 「A I ちゃん」というチャットで24時間相談できるものになっていまして、県立高校生が利用できるんですが、相手が A I なので、人だったらどんな反応があるだろうかとちょっと気にするようなことでも投げかけられるというところがあります。もちろん資格を持っている専門の相談員ともチャットでつながるということもできるようになっています。ここも検証していきたいと思っています。



A I 活用のために気をつけなくてはならない基本方針は、当然のことながら人間中心の利活用ということで、最終的に判断するのはあくまでも人間ですということで、使いこなしていけるように情報活用能力を充実させなくてはと考えております。



この時代、やっぱり人ならではのコアスキル、A I に答えを求めるという姿勢ではなくて、やっぱり自ら問いを立てる力であったり、他者と協働する、納得解を合意形成して導いていく、そして、それを実践する力という人ならではのコアスキルが大事だと思っています。普遍的価値について考えたり、人と協働する、話し合ってお互いの価値を交換するとか確かめ合うとかというのは人間しかできない。そういったところを大切にする。自ら考え、判断し、行動する力を伸ばしていく、これはまさに教育大綱に書いてあるところをしっかりと押さえたいと思っています。



そうした探究マインドを大学前の高校段階からも養っていきたいということで、今どんな探究をやっているかと、2つ事例を挙げております。

上のほうは唐津西高校です。地元を盛り上げたい、観光収益を上げるにはどうしたらいいだろうと、アンケートを取ります。そして、ニーズ分析をします。そこから仮説を取り出しまして、日帰りバスツアーをやったら良いのではないかとということで、実際に企画してやってみました。それを今検証しているんですけど、またこれを次の学年が受け継いで、さらに探究をやっていきます。

下のほうは探究プレゼン大会で、山口先生にも御覧いただいたんですけれども、これは嬉野高校です。嬉野高校は総合学科と工業科とございます。福祉系の生徒が介護実習の現場で気づいた、もっとこんな補助具があったらいいのにと。ブレーキのレバーだったりとか、つえを立てかけるところだったりとか、そういったアイデアが生まれて、それを工業科の生徒が実際に3Dプリンターで作る。そして、試作を重ねる。そして、商業を学ぶ生徒が今度は原価計算をしてチラシを作る。実際に売り出し、商品化するということを進めていきました。



探究学習を進めていくに当たって、今年度の新しい事業として、佐賀らしい探究学習を推進していきたいと思っています。教育委員会事務局の中に探究学習のプロジェクトを推進するチームをつくりまして、専門家や大学の先生、企業と連携しながら、伴走支援をしていけるような形をつくっていききたいと思っています。他校の生徒とも協働しますし、そういった探究のマインド、スキルも磨きながら、自ら課題を見つけて主体的に学ぶ人材というのを増やしていきたいと思っています。

次に、高校教育改革について。

2040年の社会構造が大きく変わる、そこに向けて高校教育改革を進めていきたいと思っています。やはり生産年齢人口が減りますし、AIとかデジタル技術の革新によって、私たちのような事務職というのは本当に過剰になってくる。そして、工業高校を卒業した生徒ですとか、理系の人材や、AIとかロボットを利活用できるような人材というのは大きく不足をしていく時代になります。これから子供たちが幸せに暮らしていくために、高校教育改革というのも本当にしっかりと取り組んでいかなければいけないと思っています。

ここに4つ挙げているんですけれども、国におきまして最大4拠点を採択したら、そこに財政支援が得られる制度がありまして、先日、我々もエントリーいたしました。

簡単に御説明をいたしますと、一番上のアドバンスト・マイスターの育成というのは、工業高校を拠点に行います。そこで、企業の実際の先進的な技術を使える設備というのも用意しまして、実践的な学びと、大学とか企業と一緒に課題解決型の学習、PBLをやっているような、そんなものをつくりたいと思っています。多くの子供たちに、自分も工業で学んでみたいというような、そんな魅力を発信していけたらと思っています。

それから2番目は、理数的素養を身につけた課題解決型の人材ということで、これは普通科高校を拠点に行いたいと考えております。宇宙を切り口に、全ての生徒、文理問わず、理数的素養を身につけていけるような探究というのを進めていきたいというふうに思ってい

ます。

それから、チェンジ・メーカーと、高校でもやっぱりここを意識していきたいと思っております。例えば、これは商業科でやるんですけども、起業家による講義とか伴走支援、それから、大学や企業と実際にワークショップをやります。実際の地域課題を題材に実証研究を行っていくラボもつくりまして、学びを充実させていきたいと思っています。チェンジ・メーカーとなるような人材を高校からも意識しながら、大学と連携して育成していきたいと思っています。

最後が、教育機会の不均等ゼロを目指して、遠隔教育配信センターをつくりたいと思っています。これからどうしても学校が小規模化していきますので、小規模校においては、例えば、大学進学するにしても、対策というのがなかなかつくれなかったりしますので、例えば、総合型選抜に向けても、プレゼンの仕方だったりとか、小論文であったり、数学ですとか英語ですとか、習熟度別に対策が立てられるようにやりたいと思っています。あと、どうしても専門の教員が不足しがちな教科というのがありまして、農業土木とか情報とか、そういったところの授業も配信できるようになったらなと思っています。

いずれの取組も大学での学びとか実社会とのつながりというのを強く意識しながら、やっていきたいと思っています。

この後、文科省のほうで審査されまして、6月の終わりぐらいにその採択の結果が出るといった流れになっております。

以上です。

○内田政策企画監

ありがとうございました。

それでは、今から意見交換をお願いできればと思います。よろしくお願いいたします。

○山口知事

先ほどの山口先生の話でいうと、僕らの学生時代はA IとかI C Tとかないわけよ。そうすると、本当に、いわゆる受験勉強をするという、受験も同じシステム。先ほどのお二人の説明にもあるように、今、受験の仕方も全く違うじゃないですか、入試の形態も。今の高校生は、高1、高2、高3と大学も意識しながら、どんな形で勉強しているんですか。

要は、自分は早いうちから、一般受験じゃないほうに行くと、高1の段階で考えて、話しているように思えないんだけど、どんな形で自分の未来像に向かって進路を決め出すのか。

○甲斐教育長

1年生の早い段階から、入学してすぐから進路をどうするかと投げかけますし、意識させるようにやっていきます。

総合型選抜はもちろん、今、探究を充実させてやっているんで、そうやって進んでいただ

きたいと思っているんですけども、なかなかこれだという、自分はこれに興味があるからこれだという生徒もいれば、幅広く勉強して、それからまたさらに後で決めたいという子もいると思うんです。

○山口知事

要は県立大学は、例えば、課題解決に適したような人たちでやりたいと僕も思うし、それに合った人たちは、お互いハッピーなんだろうなと思うので、そうすると、高校の段階からそういう素地を持った人たちが、パッションがあふれるような人たちがいてほしいですね。

○山口佐賀県立大学（仮称）学長予定者

ちょっと言葉が難しいんですけど、自分は所属している立教大学経営学科では、採用だと思って学生集めをしていて、いい大学というか、いい学びの環境を一緒につくってくれる。プロジェクトをやったりするときも。そうすると、そこに合う人たちを集めないといけないと思っていて、それが多分、集う人たちにとってもハッピーになるし、いわゆるペーパーテストのスコアだけで上から順番に採っていくということをやると、それが多分なかなか難しいので。

あと関東圏と佐賀と事情が違ってもいいんですけど、やっぱり受験産業がいろいろとやっていて、総合型選抜では、例えば、こういう経験をしておかないといけないからみたいな指導を予備校がやる。

○山口知事

そんなことまでやっているんですか。

○山口佐賀県立大学（仮称）学長予定者

海外に行ったほうが良いですよとか、こういうボランティアがありますというのを全部アレンジしてくれるんです。だから、高校生は何もそこで成長しないんですよ。

自分で自分が好きなことをやっているというのが本当は理想だし、伸び伸びと育つという意味でいうと、本当はそうあるべきだ。だから、入試の情報とか開示せずに本当はやりたいんですよ。入試の情報を開示すると教育が入試自体への対策に比重を置きがちになるのではないかと感じています。

○山口知事

飯盛（いいもり）委員、どう思いますか、そういう日本のシステムを。何か受験があると、せっかくこことか総合型とかいったって、それが全部プログラム化して、何かそれに合うよ

うな形の制度にまたなってくる。

○飯盛（いいもり）委員

私は、日本で受験したことがないので、海外は受験そのものがあんまりないんですよね。だから、窓口は広いけど、卒業するのがすごく狭き門です。だから、入った後もいろいろ勉強するし、インターンしたりとか、いろんなプロジェクトに入ったり。そこを評価されて最終的に単位を取って合格するという制度なので、県立大学もそういうプロジェクト、PBLをたくさん導入するというプレゼンをされていたけど、その辺がたくさんあると、参加する在籍する学生も物すごく有意義な学生生活を送れると思うし、県民にとっても、いろんなところでプロジェクトに参加できるのであれば、県民全体で運営していくような大学になると思いながら、さっき話を聞いていたんですけどね。

○飯盛（いさかり）委員

今の高校、中学校、小学校にしても、例えば探究的な学習をもっとやりたいとか、文部科学省の学習指導要領の範囲の中で、そこを何とか県独自で動かせる分はちょっと幅を広げるとか、そういった方法があるのではないかという気がしますね。

○甲斐教育長

学校によっては丸2日間、自由な日をつくって、その2日間は何をやってもいい。探究学習で遠くまで行ってもいいし、そういうのをやっているところもあるので、広めていきたいなと思っています。

○飯盛（いさかり）委員

小学校の教員をしていた経験から、本当に今の子供たちは経験不足で、教える担任の先生が既に若い先生中心になってきていますから、経験不足のまま大人になって先生になっている人が多いから、させようがないというか、例えば、御出身の富士町とか、大和町の上のほうとか、あの辺りがどうなのかと言われると、結構まだ残っていると思うんですよ。山村留学とか、それから、佐賀県は島で島留学とかもやっていますので、そういう活動でこんなたくましい子が育っているというのはもっとアピールしてほしいんだけど、じゃ、中心地でどうやってやるのかとなると、なかなか指導者もないし、それこそ地域のおじさん、おじいちゃん、おばあちゃんに頼っているようなところも結構あると思うんですけどね。

○山口知事

だから、昔と違うんだよね。今の社会は僕らが育ってきた時代と全く違って、それを親の世代も分かってくれと大分仕事しやすいけど。本当に課題解決するような人が充実した人生を歩めるような社会に今なりつつあるんだけど、そこに気づかずに普通の勉強だけを追って、荒木先生、どうですか。

○荒木委員

私も子供がいるんですけど、インターネットで高3でも間に合う総合型選抜みたいなものがニュースで流れていて、子供の親だということを分かって、向こうが、何となく高1から準備していかないと駄目なのかしらと思うような層に対して、やっぱり受験業界がそういうふうな言葉で来ているんだなと思うと、やっぱりすごいサービス産業の世界なんだなと思いつつ見えていました。

あともう一つは、スーパーサイエンスハイスクール、致遠館高校の指導とかをさせてもらっているんですけど、研究のテーマを見つけるということが一番の醍醐味で、致遠館高校さんは研究のいろいろセットがあるんですけども、何でその研究をしようと思ったのかという質問を私は必ずするようにしているんですけど、前の先輩がしていたからとか、そこである程度小さい頃、それこそ魚釣りをしていて、こういうことで困ってとか、世の中の今私たちのまちがこうだからここを変えたいんだとかいうようなものが見つかるといいねみたいな話をいつもしているけど、なかなかそれを最初から探すのは、今、中学生も高校生もとても忙しいので、きっと難しいんだろうなと感じています。

○山口佐賀県立大学（仮称）学長予定者

今の話からいくと、今の子供たちは守られ過ぎていて、危険な目に遭わないというか、そこで自分で考えて、危ないねとか、こうしないといけないねということをなかなかできない。それは多分、大人の問題のような気がして子供として危ないかどうか判断しながら、多分、AIの話とも絡んだときに、その時々で常に自分で判断していく訓練をどこまでできているのかというのがすごく重要になってきて、入試も含めて、多分、親に言われたとおりやっている子というのがすごく多くいて、自分で決めていないというのは、大人になっても決められないんじゃないかという心配がずっとあって。

○山口知事

星生学園は自分で考えて入ってくるでしょう。

○加藤委員

そうですね、学校説明会とかオープンスクールに来たら、やっぱりここでやりたいという本人の強い希望があります。

星生に入ってくる子は、中学校までは親が全部決めていた。むしろ親が決めていて、お母さんがそう言ったから自分は不登校になったとか、そういう感じになるんですよね。だから、親が高校を決めるときに何も言えなくなっているんです。あなたの行きたいところを応援するよといってから、そんな感じで入ってきます。だから、子供たちは自分でやりたいから入ってくるから、いろんな形で結構伸びるんですよね。

○山口知事

だよな。今度、星生に入ったときは決めたのは自分だもんな。

○加藤委員

そうです。自分で選んで入ってくるから、そこが違いますね。

○山口知事

そうですね。

○加藤委員

山口先生が先ほど大学入試が3月とかという話をされたじゃないですか。それで、ちょっといろんな意見が出ましたということで、今、私立大学とかの入試がものすごく激戦というか、すごいんですよ。なので、大学入試の傾向で、総合型選抜が増えているということで、増えている理由はそれなりにあるんですよ。だから、総合型選抜がやっぱり自分が学びたいものを学べる学校、大学ということで、私学がエントリーシートを5月ぐらいから出す。それで決めてしまう。選考がどんどん早まっている。それは少子化がどんどん進んでいるので、進路ガイダンスもものすごく早いです。各大学とか専門学校が、いっぱい入ってくるんですよ。

○加藤委員

どんどん早まっていて、だから、そこが県立大学も、願書の提出とか入試の傾向はどういうふうにされるんだろうと思っていました。

○山口佐賀県立大学（仮称）学長予定者

一般入試の時期に総合型選抜がやれると理想だと思っていて、東北大が表明しているのは多分そのやり方だと思うんですよ。私立大学がやっている総合型選抜は11月から年内で、今、文科省が11月以降でないと合格発表してはいけないというふうに指導しているので、11月1日に私立も含めて発表するんですけど、本当は高校が終わった段階で総合型選抜がやれるというのが理想で、あと、学校長推薦とかは大体11月ぐらいに推薦してもらって、そこで確定して、残りを一般入試でと今なっているんですけど、県立大学もほかの大学と時期的なものは合わせないといけないので、多分11月、12月ぐらいに総合型選抜をやって、共通テストが1月にありますので、それを利用した形で多分2月、3月、国立大とかと合わせた形のところで一般入試をやる。

本当は一般入試の時期に共通テストを加えた形での総合型選抜ができるというのが理想なのかなと思っていて、それが開学のときから実現できるかどうかは難しいところなんですけど、将来的には多分そっちになっていくんじゃないかと思っています。

一般入試でも面接は必ずやりたいと思っていますので、一般入試と総合型選抜といったところで、今の一般入試を総合型選抜的な形で運用するということが自体は可能なんじゃないかとは思っていて、一番は、やっぱり高校のときは高校でしっかりと成長してほしいなというがあるので、例えば、2年生の頃に大体大学は決まっていますよみたいなことは本当は避けたいなというのがあります。

○加藤委員

本当ですよ。国公立はそうやって基準がきちんとあって、そこに決めて行けたら行ってほしいと思うんですけど、私学が本当に早くて、私学は、国公立もそうなんですけど、利益の追求と教育の質というのは一緒じゃないですか。だから、経営もしていかないといけないし、教育の質も担保していかないといけないという、そこら辺の難しさはあるなと。早く採ったが勝ちで、こういった事情は学生には分からないですもんね。

○溝上委員

山口先生が先ほど、聞き違いだったらごめんなさい、学生さんの入学を採用だと思っているというふうにおっしゃったのがすごく印象に残っているんですけども、その辺の思いとか、具体的にどんな感じでおっしゃっているんですか。

○山口佐賀県立大学（仮称）学長予定者

県立大学もそうですし、今いる立教大学の経営学部も、教員、職員が大学のサービスを提供しているということではなくて、そこに集う学生も一緒になって成長の場をつくっていくと。だから、ある意味、社員という考え方はしているんですよ。

○溝上委員

お客様じゃなくてということですね。

○山口佐賀県立大学（仮称）学長予定者

というのは学部長として常に意識づけていて、不満があったときには提案として持ってきてほしい。それを一緒になって考えようといって、ずっと毎年毎年改善していく。そこを理解してくれる学生とそうでない学生もいて、そこがちゃんと意識が変わってくれないと、なかなか大学をよくしていくということにつながらないので。

一番は、最近が変わったんですけど、自分が受けた教育よりも、いい教育を後輩が受けるというのが改善じゃないですか。それをよしとしない先輩がいるんですよ。だから、その意識をすごく変えないといけないくて、自分たちが苦労した分で、自分たちが提案して改善したので、後輩がいい思いしてくれるというところに幸せを感じてほしい、喜びを感じてほしいという文化が作り上げられると、すごくうまく回っていくなと思って、そういうことを

理解してくれそうな子かどうかという感じで採用をしていこうというのは常に意識しています。

だから、総合型選抜に近い形の入試だとそこが見れるので、高校時代にどういうことで困って、どういうふうに改善したかみたいなことはよく聞いています。

○溝上委員

ありがとうございます。

採用という言葉をお使いになられたのは、恐らく受け身じゃなくて、大学から見ても学生さんにプッシュしていくみたいなのも多分おありなんだろうなと思いましたし、今おっしゃったように、大学のビジョンとか、こういう子に来てほしいんだよねみたいなことというのが多分話されているんだろうなと想像しながらお聞きしたのと、恐らく学生と大学の双方に問題があって、学生も大学に多くを求めないというか、大学も学生に対してビジョンがなかなか伝わっていないとか、この学校で何が得られるのかがよく分からないみたいな、何かそういうミスマッチコミュニケーションみたいなものがあるんじゃないかなと思いつつ話を聞いていました。

○山口知事

学生も一緒になって、いい大学とかいい組織をつくっていこうと。

○溝上委員

めちゃくちゃいいです。

○山口知事

だから、すごくいい話だなと。後輩へよりいい環境を提供するみたいな。考えてみると、職場も大学も何か似ているよね。

○溝上委員

相当似ていますね。

○山口知事

大学という概念がだんだん違う、生き生きとしたものに見えてきたというか、受動的じゃなくて。だって、学生も一員なんですからね。

○山口佐賀県立大学（仮称）学長予定者

はい。いわゆる教員も職員も成長していくんですけど、一緒に成長していくというのがやっぱり大学で、研究なんかも当然そうじゃないですか。大学院生も含めて一緒に研究してい

って、共同研究者なので。だから、研究というレベルじゃないかもしれないんだけど、いろんなことを変えていったり、プロジェクトを回していったりするときは、やっぱり対等な立場での人間として一緒にやっていく仲間という意識がないと、語弊のないような形で、お客さんじゃないよということは県立大学としても最初のメッセージとして伝えないといけないなど。

○甲斐教育長

そのほうが楽しそうですね。学生も楽しそうだと思います。当事者になれるというのはすごくいいなと思って、お聞きしました。本当は学校はそうあったほうがいいですね、大学だけでなく、そうなのかなと思って、お聞きしました。

○山口知事

この辺の感動というか、感性を高校生が共有できたらいいよね。

○甲斐教育長

今、探究学習をやっている、やっぱり楽しいとすごく言っていますし、生き生きと発表してくれているし、いろんな刺激をもらえるので、すごく今いい環境になってきているなと思っています。

○飯盛（いいもり）委員

随分前ですけど、この場で校則について議論したんですけど、あれも学校側が校則を決めるんじゃなくて、やっぱり自分たちのルールを生徒会とかで決めさせてという風潮が今は主流になっていると思う。

○山口佐賀県立大学（仮称）学長予定者

佐賀西高は生徒会が決めていませんでしたか。

○溝上委員

生徒会が結構やっていた気がしますね。制服もね。

○甲斐教育長

制服はなくなりました。標準服という位置づけになりました。

○山口知事

山口先生は佐賀西高ですか。

○山口佐賀県立大学（仮称）学長予定者
佐賀西高です。

受験の指導をしてもらったことはあまりなくて、その代わり、本当に学びの本質は言われて。

○山口知事
めちゃくちゃいい高校じゃないですか。

○山口佐賀県立大学（仮称）学長予定者
佐賀西には感謝していて、テストの点数を取るための勉強じゃないことをちゃんと当時教えてもらったという印象があって、だから、そこで何か学ぶことについての楽しさみたいなことを教えてもらったのが佐賀西だったので、そういう伝統は残っているはずです。

○笹谷副教育長
確かに昔、生徒総会とかは絶対教員を入れないとかありました。

○山口知事
いいじゃん。

○笹谷副教育長
今は大分変わってはいますが。

○山口知事
だから、今ここで議論して、高校も個性を伸ばすようにしたんです。私立高校と思ってやってもらいたいなと僕は思っていて、あえて県の高校とかしなくたって。唐津青翔とか、めちゃくちゃ生き生きしていたよ。
いろいろ考えながらやっていたし、eスポーツ学科も盛り上がっている。やっぱりいろんな教育の形が今あるんじゃないかな。

○山口佐賀県立大学（仮称）学長予定者
だから、いわゆる高校生も選択の権利があって、県立大学があるというか、そこがいいと思った子は来てほしいし、そうじゃない子はまた別の大学で

○飯盛（いさかり）委員
ちょっと視点が違うところかと思うんですけども、少子化が進んで、とにかく早く入学試験の合格を出して決めてしまいたいという、この流れはどうもやっぱり止められないよ

うな気がします。だから、決まった時点で、その後、高校生として残っている期間に大学でいろいろ課題を出すとか、そういう鍛え方というのが面白いんじゃないかなと。

合格しないといけないがための勉強というのは生徒も嫌ですよ。でも、合格した後、じゃ、こんなことを勉強すると自分で決めて、それこそ探究につながるような、そういった内容の勉強というのは喜んでやるんじゃないかなという気もしますし、それが代々続いていけば、それは大学のほうで面倒を見てもらえるような先生たちがいらっしゃればできそうじゃないかなという気がします。

○山口知事

そうですね。県立大学のPBLの学習とかは、高校とかにも入って行って、一緒にやっていきますよね。別に県立大学に入る入らないは関係なく。

○甲斐教育長

いろんなフィールドワークを。

○山口佐賀県立大学（仮称）学長予定者

本当は何度も自分はいろんなところで言っているんですけど、大学卒業した後に、そこで学びは終わりじゃないというのを県のスタンダードにしてほしくて、要するに2回目、3回目、5年に1回は大学に行くよみたいな。働き方改革の中で、例えば、4日間働いて2日間休んでいる1日は何か勉強みたいな。そのときに県立大学を利用できるような仕組みというのは、だから、一生勉強し続けたいといけないということが佐賀県民のスタンダードになってほしいなど。そのための役割を県立大学は果たさないといけない。

だから、大学卒業して人生残り50年というのを4年間の大学生活だけで賄うというのは多分無理なので、いろんな新しいことにチャレンジしようとしたときに、例えば、うちの大学だと、6年働くと1年サバティカルで研究だけに従事できて、リニューアルして次の教育に生かすみたいな、6年間働いたら1年休むみたいなのが立教大学はあるんですけど、そのサバティカルの制度は多分全国いろんな大学にもあるんですが、それは一人一人の国民全員に本当はあったほうがいいような気がしていて、だから、何かリニューアルして、今は多分一生同じ会社で働き続けるじゃないので、5年したら必ず転職して、何かブラッシュアップして次にステップアップみたいな感じでというのが本当はあってほしくて、だから、今回、県立大学、特に今は小中高との連携みたいな話をやっていますが、上の人たちが県立大学に入ってほしい。

だから、大学の機能が今は高校生を中心というふうに思われていて、ところが、人生一生勉強だといったときに、時々大学で勉強するよというのになってくれば、今の大学の数では絶対足りない。というふうなことをぜひ県立大学で実現したいなど。

○山口知事

どうですか、年を取ってくると、だんだん勉強が楽しくなっていないですか。あの頃はあんなに嫌だった勉強が、今はむしろ、勉強という言葉が合わないかもしれない。勉強という、この2文字。

○山口佐賀県立大学（仮称）学長予定者

そう、「強」じゃないでしょう。

○山口知事

いろんなことを知りたいよね。佐賀県民にそういう人をもっと増やしたいなというか、これが分かったらみんなそう思うはずだから。

○加藤委員

違うと思います。

○山口佐賀県立大学（仮称）学長予定者

プロジェクトにいろいろ協力してもらうときに、これだったらもう一回大学で、短期間でいいんだと思うんですよ。何かそういうプログラムを常に学べるようにして、多分そういうプログラムを県立大学としてはちゃんと用意していかないといけないんだと思いますけど、それでサイクルを回すと、県の知の総和がどんどん上がっていくと思います。

○山口知事

まさにそう。

楽しみです。でも、今、佐賀大学もどんどん盛り上がっているから。

○荒木委員

リカレント教育がすごく……

○山口知事

リカレント教育。

○山口佐賀県立大学（仮称）学長予定者

だから、そこですごくみんなが大学を利用するようになって、それは大学経営として考えたときも、そこでお金をもらわなきゃいけないことにはなりますけど、多分それが今のすごい少子化の中で大学をどうするかと言われたときの一つの大きな解決策なんじゃないか。、平均年齢が低い大学は多分日本だけなんですよ。

○飯盛（いいもり）委員

だから、私も大学の授業を受けていたときに、30代、40代の同級生がたくさんいました。やっぱりリカレントというか、自分がやっていたことと違うなと思ったので、学び直しで、私は経済だったんですけど、経済の勉強してという生徒がたくさんいたので。

○加藤委員

コミュニティーカレッジとかありますもんね、アメリカとかは。大人がいっぱい学びに来る。

○溝上委員

アメリカでは学位を取るんですかね。なぜ勉強しに行くか、30代、40代の人たちというのは。何か単純に勉強してというか。

○飯盛（いいもり）委員

ほかの仕事をしていたけど、やっぱり4年制大を出て学位を取って別の仕事に就職したいからキャリアアップとかで。必ずしも4年制大卒業している人がみんなじゃないので。

○山口知事

だから、常に転職しているから、そのときのスキルでね。スキルを身につけて、また転職して、今は（日本も）変わってきていますよね。

○山口佐賀県立大学（仮称）学長予定者

だと思ふし、今、例えば、AI人材とか、データサイエンス人材とか、もっと前でいうとグローバル人材が足りないみたいなことを言われるんですけど、そこで終わってしまうんですよ。そのときにそこで勉強して、また何年かしてそっちを勉強してということで、どうしてもやっぱり常に学び続ければどんな人材にもなれるので、今、何か足りないからというので、定員をどうかして、そこに縛りつけて何かやるとすると、またどうせ10年後、何かの人材が足りなくなるのは繰り返すことなので、そのときに常に学び続けるという習慣ができていると、その辺、何とでもなるような気がするので、佐賀県はぜひ学び続ける県みたいなことで。

○山口佐賀県立大学（仮称）学長予定者

だから、休めるということがすごく大切に、本当言うと、佐賀県は特に、自分が育った周りほとんど大学に行っていないんですよ。それは何でかという、農家だったから。農家は大学は出なくていいみたいな、それは仕事できるからみたいになっていて、やっぱりそこは変えないといけないんだと思うんですね。大学に行けることによって、すごく効率的なと

か、自分の農業のスキルをもっと広げてというのはあるので、その辺の人たちもぜひ県立大学に関わってほしいなと。

だから、大学進学率 100%どころじゃなくて、2 回も 3 回も行くので、200%、300%みたいになってほしい。

○山口知事

ほしいですね

○飯盛（いいもり）委員

まさしく自分の知り合いの農家だったり、お酒を作っている友達とかがいて、佐大の農学部に行って修士を取って、今、世界進出とかいろいろやっているの、そういうステップアップはいろんなところで必要なんじゃないかなと。

○山口知事

そうですね、だから、30 年ぐらい前は佐賀県は 1 万 2,000 人中 2,000 人しか四大に行っていないから、逆に言えば学年で 1 万人が高校卒業して就職しているわけです、昔は。そういう皆さんも勉強したいなと思う時代だし、農業だって今はできるから、技術開発とかいろんなことを。そういう雰囲気県民全体でつくり出すようにしていくと、みんなハッピーになるね。

○山口知事

そうすると、生産性も上がって、もっとみんな休めるようになるし。

○加藤委員

はい。休むのも大事ですよ。

○山口知事

A I だって結構労働するからね。

○加藤委員

そうですね。

○飯盛（いいもり）委員

A I を導入することによって業務を効率化させて、その余った時間でそれこそ学びをすとか。私がうちの職員によく言っているのが、仕事を効率化させて、余った時間で、保育士の本当の仕事は子供たちと直接過ごすことじゃないですか。そこにもう少し時間を充て

てくださいと言っているんですよね。

○山口知事

これは山口先生にはたまに来てもらって、開学までまだ2年半あるから、いろいろと定期的に意見交換をしていくと何か有意義ですね。

○内田政策企画監

そのように調整をさせていただきます。

そしたら、すみません、そろそろお時間となります。

以上をもちまして第35回佐賀県総合教育会議を終了させていただきます。本日は大変ありがとうございました。